

中国の雲南省をはじめ訪れたのは一九八六年のことだった。タイで少数民族と知り合い、彼らの生活にひかれて通いつめているうちに、雲南省から南下した民族だと知り、彼らの故郷を見たくて訪れたのがきっかけだ。

雲南省の最南端、ラオスとの国境にシーサンパンナというタイ族の住む街がある。今では日本からでも一日でいけるが、当時は省都昆明からバスに揺られて二泊三日が定番だった。そうして訪れたかの地は亜熱帯性気候で、女性たちは目も眩むような原色のサロン（腰巻状のスカート）を身にまとい、長い黒髪を束ね、ヤシの木が並木道をつくるなか、色鮮やかなハイビスカス、ブーゲンビアと絡まり、もつれ、戯れている。どこか東南アジアの一地方都市といった通じてもしまいそう。

以来シーサンパンナが気に入った。その後何度となく訪れるようになってきたのだが、ある日、夕涼みもかね、メコンの岸辺にいくと、女性たちが川で洗濯や、髪を洗っていた。濡れたサロンが体にはりつき、あらわになった曲線美がたまらなく色っぽい。近くでは子どもが一〇人ほどいて、泳いで土手にへばりつき、みんな体を真っ黒にしながら遊んでいた。まるで自分の原風景を見ているようだ。



シーサンパンナというところ

鎌澤久也

プロフィール
1952年岩手県生まれ。写真家、駒澤大学非常勤講師。アジア各地の人びとの暮らしを追い続け、「雲南」など多くの写真展を開催。近著に『シルクロード全4道の旅』『シーサンパンナと貴州の旅』『メコン街道』など。

街の郊外では毎週日曜になると、青空マーケットが方々に開催される。会場となった通りは人、人、人でこった返し、タイ族やアイニ（ハニ）族、ラフ族、プーラン族が、肉や野菜、山で採った山菜などを売っている。商売のかたわら刺繍に精をだす女性もいる。どの民族も一目でわかる独特の衣装を着ている。自分たちのアイデンティティを誇示しているのだ。

日本に馴染み深い食べ物も多い。豆腐、コンニャクはもちろんで、赤飯、チマキ、納豆まで売られているではないか。一時、「照葉樹林文化論」というのがもてはやされたことがある。カシ、ツバキなどの照葉樹が自生する、ヒマラヤ南部から西日本にかけて、共通の文化がみられるというのだ。それが高じて雲南が日本文化の発祥と考えられたこともある。事実はどうであれ、この地域をまわっていると、そう考えても不思議ではないと思つた。

しかし、近代化とともにこうした定期市も簡素化され、民族衣装も徐々に脱ぎ捨てられるようになった。糸を紡いで織る衣装よりも、お金さえ払えば簡単に手に入るプリントされた布が魅力的なのだ。ゆくゆくは民族衣装も祭り、結婚式といったハレの日には、お目にかかれなくなりそう。

月刊
みんぱく
7月号日次

- | | | | |
|----|-----------------------------------|----|----------------------------------------------------------------|
| 1 | エッセイ 千字文
シーサンパンナというところ 鎌澤久也 | 14 | 地球ミュージアム紀行
陳氏一族の栄華と革命の歴史を刻む
広東民間工芸博物館（陳家祠・陳氏書院）
川口 幸大 |
| 2 | 特集 世界のことば、ことばの世界 | 15 | みんぱく 私の逸品
ハワイの女性神像（アウマクア）
須藤 健一 |
| 3 | 世界のことばの数はどこから 庄司 博史 | 16 | 散策と思索の径
ドイツ・バイエルン州の森を歩く
佐々木 史郎 |
| 4 | 「ことばスタンプ」ができた! 鎌澤 律子 | 18 | 多文化をささえる人びと
ある無料雑誌から垣間みる
在日ブラジル人の動向
アンジェロ・イシ |
| 5 | はじめての手話の展示 亀井 伸孝 | 20 | 歳時世相篇
ビール的美味いころ
神話としての「やってみなはれ」
出口 正之 |
| 6 | 系統と語順 長野 泰彦 | 22 | フィールドで考える
エリートは語るができないか
太田 心平 |
| 7 | ことばが世界をつなぐ~世界の絵本~ 菊澤 律子 | 24 | 次号予告・編集後記 |
| 8 | 世界の文字 八杉 佳穂 | | |
| 9 | 方言のたのしみ方 井上 史雄 | | |
| 10 | 研究フォーラム
モノと人の関係を問い直す
竹沢 尚一郎 | | |
| 12 | みんぱく Information | | |